

する考證で、親鸞日野家出身説以下、つ

とめて傳繪の所傳を信憑する態度を取り、この點、今日の學界の傾向に先行するものとして注意したい。本章では特に

寛嘉三年を以て以前を親鸞の自行時代、以後を他時代と區分するのが目立つ。

以上で前編を終るが、後編に移る前に附錄三章を設け、「本願寺における御傳鈔拜讀史」、「本願寺における御傳鈔讀法の變遷」、「御傳鈔の註疏について」述べて

いる。何れも從來全く解明されなかつた問題であり、且つ異色ある研究として注目すべきである。後編は全傳繪内容に対する逐條解説で、東本願寺康永本、西本願寺本、専修寺本、千葉縣大原町照願寺本（康永本系）、東本願寺弘願本（康永本系）、流布本の六本を對照し、各段互に對照本文をかけ、次いで語釋、大意を施し、更に親鸞の系譜、吉水入室、三願轉入、六角夢想、信行兩座などの重要な問題について論考を加えている。對照されていいる諸本は覺如眞筆本、善如書寫本や異系統に屬するものなどの、夫々の意味で最も基本的な重要性を持つもので、これが一見比照され得ることは誠に便利

であり、從來試みられなかつたことだけに、學界を裨益するところが大である。

また語釋、大意、論考も夫々適切且つ要を得ていて特に初學者にとつて親切である。

以上が本著の大要であるが、尙外に、

編者によつて流布本以外の五本の出家學道段詞及び繪、廟堂創立段繪、奥書の寫眞が掲げられて原型比較に便ならしめられ、其他新村出博士撰文の故教授記念碑文や、故教授略年譜、著述論文目録等が附されている。何分二十年前の論攷であるから、其後に於ける學界の研究成果とやや齟齬を來す箇所も二三あるが、概ねその様な所には編者の手で附註を以て注意されている。全體の舒述の態度としては出來るだけ傳繪の記載を他の文獻との考慮に於て生かすことに努められ、それは何よりも著者の宗教的人愛情に基いていることが感ぜられて興味深い。そして本書がこのような愛情に支えられているからこそ、單に専門的な論究としてのみでなく、一般的な宗門人の教養書としての意味をも充分持つてゐることを特に指摘したいとおもう。（昭和三三・一一、

中國佛教の研究

横超慧日著

史籍刊行會刊。第一・二〇〇）（柏原）

太平洋戰爭終了後、すでに十四年を経過しながら、古くは同文同種と慣稱された日本・中國の友交も、政治形態の相違から、いまだに早急にその國交が恢復しえるとの豫測は全く許されない。ことに共產中國における佛教教團の存在も、政治的宣傳のための道具と考えられないでない一面のあることが、通りすがりの旅行者にも看取できるよう今日、傳統的な佛教精神と抵抗しながらも、二十年にわたつて、中國の思想文化史に重要な影響を及ぼしてきた中國佛教も、もはや一つの終極點に達したかに思われる。このようなときには、わが佛教界における中國佛教の研究は、その史的な研究を中心として、最近一、二年の間に多くの著作が公にされてゐる。昭和三十二年度のみを例にとつても、唐代佛教史の研究（道端良秀）・日支佛教史論攷（岩井大慈）・シナ佛教の研究（津田左右吉）・中

國近世佛教史研究（牧田）などがあり、わが横超博士による「中國佛教の研究」も、その出版日附は昭和三十三年一月十日であるが、事實は、昭和三十二年度の出版と稱することができる。しかも他の多くが、中國佛教史に關する歴史的考證を中心としているに對して、横超博士の著書は、宗派的立場から考察するという研究上の偏見と、中國傳統の固有文化と併せ學ぶことの困難との二つを同時に克服することに努めながら、常に廣く歴史的發展の中に、中國佛教の種々相を読みとりたいとの念願をもつて、十數年來の此の種の研究成果の一端を報告せられたものである。

横超博士は、中國佛教は苻秦・姚秦の佛教から始まり、それ以前の佛教は、いわば外來佛教のそのままのかたちであり、まだ中國社會に根を下していない、移植されたままの形であつて、中國佛教として取扱うには疑問を持つておられるようである。嚴密な歴史的な立場からはもとより問題の存するところであつて、苻姚二秦佛教の素地となつた二・三世紀の中國佛教の實態を研究することなくし

ては、北方胡族の間にさかえた、漢民族の間に行われたとは異質の佛教とその教團を理解することは困難であるかも知れない。ただ本書があくまで「中國佛教の研究」であつて、中國佛教の史的研究でないことは、横超博士の立場を可能ならしめるかも知れない。

(一) 廣律傳來以前の中國に於ける戒律、(二) 初期中國佛教者禪觀の質態、(三) 中國佛教初期の翻譯論、(四) 中國南北朝時代の佛教學風、(五) 中國佛教に於ける大乘思想の興起、(六) 中國佛教に於ける國家意識の六篇の長論文から成る本書は、そのいづれの題目を見ても、中國初期佛教における重要な、意欲的な教學と歴史研究にわたる問題でないものはない。

もちろんこの六篇の論文は、時間的には、本書出版のために書き下された第一の廣律傳來以前の中國に於ける戒律や、約二十年前に發表された第六の中國佛教に於ける國家意識など、相當な年時のひらきがあるが、然しそれの論文の立場などは全く同様の手法でなされていて、

初め三篇は、いわゆる中國佛教の基礎

本書收載中の最古の研究論文である、中

國佛教における國家意識なる論文にも、そのようならずけの缺けていることを認めざるを得ない。これは單なる教學史の問題ではなく、中國社會・佛教の歴史考證のうらづけがあつて、より完全な研究が得られるのである。

中國にかぎらず、インド・日本においてもその教學研究がともすれば、狭い範

圍に局限され、たとえば僧暦であれば

聖論、羅什・慧遠は大乘大義章のみの領域ですべてを理解しようとする從來の試みは、あたかも佛教史の研究が、ともすれば、教學のうらづけのない、單なる歴史的現象の羅列に終る惡傾向におちいりやすいのと同様に、學徒の戒心すべきことと言わねばならない。これは實は横超博士の著書への批評ではなく、私自身の研究態度に對する省を述べさせて頂いたのである。(牧田諦亮)

[法藏館刊 A 5 版本文三八一頁價九〇〇圓]

Vimuktimarga Dhutangānirdeśa
Critically Edited by Genjun
H. Sasaki

解脫道論
—頭陀品チベット校訂本文並びに譯註—

佐々木現順校訂

この書はその副題に示されているように、漢譯解脫道論の第三章頭陀品、南傳 Visuddhimaggā の第二章 Dhutanga-niddeśa に相當するチベットの本文にその和譯と註釋とをつけて出版されたものである。解脫道とは解脫への道であつてここでは戒定慧の三學を意味する。三學を修するに當つて先ず戒學において、戒を清淨に持するには少欲知足などの功德を成就すべきであり、その功德は頭陀 (dhuta 又は dhūta) の行によつて得られるのである。頭陀 dhuta とは「振り捨てられた、取り除かれた」という意味で、智によつて煩惱を減ずるところの行をいい、anīga は支分でそれを實踐修行する項目である。これに十三あつて、衣食住の衣に關するものが(1)糞掃衣、(2)三

衣の(1)食に關するものが(3)乞食、(4)次第乞食、(5)一坐食、(6)節量食、(7)時後不食の五、住に關するものが(8)無事處坐、(9)樹下坐、(10)露地坐、(11)塚間坐、(12)遇得處の五、精進に關するものが(13)常坐不臥の一である。パーリ傳や有部などでは十三であるが中觀系は十二で、十二頭陀經という經典もあり、一般に十二頭陀といわれている。これ等の頭陀行の支分の一について、その意味、どうしてそれを受けるか、どうすればそれを失うか、どのような人がこれを修するかなどについて細かく述べるのがこの頭陀品である。頭陀品自らはこの頭陀行は佛陀が制定せられたものであると説いているが、頭陀説はパーリ佛教の中で漸次整えられて、後に有部や大衆部などの經律、中觀派、瑜伽派の大乘の論にも説かれるようになつたものであろうと考えられる。この十三の項目は律の細かい規定とも通ずるものを持つてゐるが、ともかく部派佛教時代の教團において、律とは別に解脫への道として實踐修行されて來たものであろう。解脫道論の中の頭陀品だけが、どうしてチベット藏經の中に傳え